広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

ガラスの色彩、紋様で可能性は無限

竹田 礼人　長崎県／グラスブロワー

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。長崎県選出の匠、グラスブロワー・竹田礼人さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

竹田さんの代表作「長崎チロリ」

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

試行錯誤繰り返し 作品に命吹き込む

竹田さんの代表作は18世紀ごろ長崎で作られていた鮮やかな瑠璃色で、優美な形状の冷酒用急須「長崎チロリ」。ガラス工芸家の父、克人さんの工房「瑠璃庵（るりあん）」の2代目職人として、美しい球体の胴、宝珠形のふた、制作が最も難しいとされ、作品全体の美しさを左右する繊細な注ぎ口などを再現する。

約1100度の溶解炉の中で水あめのように溶けていくオレンジ色のガラスはまさに生き物で、温度管理を常に頭に置きながら作業しなければならない。ガラスを長い吹き棹（さお）の先端に巻き付け、棹から伝わる熱やガラスの厚み、曲線などを短時間の間に確認し慎重に仕上げていく。また当時のチロリは持ち手の部分が金属で加工されていることから重く使いにくいため竹田さんはツル科の落葉低木、アケビのツルの部分を利用。使う人の利便性も考えた上で柔らかさも醸し出す。

アルバイト感覚で二十歳から作業に携わったが、次第に美しいガラス工芸のとりこに。数え切れないほどのやけどや試行錯誤を繰り返しながら多くの作品に命を吹き込んできた。長崎は海外からいち早く制作技術が伝来した「日本のガラス発祥の地」だが、工房ができる以前は市内に出回っていたガラス製品の9割以上が中国産。観光客らに地元産の素晴らしい作品を届け続けたいという思いも竹田さんの創作魂に火を付ける。

竹田さんのプロダクトは、江戸期から続く伝統の祭り「長崎くんち」の奉納踊「龍踊」の「龍」の目をモチーフにしたランプシェード「My Eyes' Incarnation 明 M.E.I.」。竹田さんは毎年、当番町の演（だ）し物となる龍の目の部分を吹きガラスで制作するなど深い愛着を持ち、プロダクトのアイデアにも生かす方向性を打ち出した。だが、約400年の伝統を誇る奉納踊の神聖な領域にまで踏み込んでしまうとの思いもあり当初は制作に躊躇した。だが、日本を代表するラグジュアリーブランドのレクサスが掲げる「常識に縛られない自由な発想と革新」と「匠」を大切にする心意気こそが、長年温め続けていたアイデアを発表できずにいた竹田さんの葛藤を打ち破った。

竹田さんが手掛けた
「My Eyes' Incarnation 明 M.E.I.」

インタビューでプロダクトへの思いなどを語る竹田さん

ランプシェードの優しい光を楽しむ家族

長崎の世界観 龍の目で表現

プロダクトは、龍が約400年もの間、網膜に焼き付けてきた、長崎のまちの風景や歴史などの世界観を表現。ガラスを通して、いかに地域性を表現するか、伝統を守りつつ、いかに革新を生み出せるかなど技術面よりも精神面でのチャレンジが大きかった。3つのパーツで構成し、光源をセットした下部ガラスの上に内部ガラスを載せ、さらに下部ガラスに上部ガラスをかぶせると内部ガラスの紋様が光源によって上部ガラスに投影される仕組みだ。

光源にはろうそくを使うことも検討したが、すすが出て汚れるなど頭を悩ませた。エリア・コンサルティングでサポートメンバーの下川氏から照明部分にかぶせるガラスの紋様と色彩の組み合わせによる「灯りの質」やデザイン性、機能性などの助言を受けたことから、コスト面などを含め市販の電球を使用することに決めた。その際、下川氏から作品の完成度について評価されたことが自信につながったという。

プレゼンテーションでは動画ではなく、友人である長崎市の写真家、山頭範之さんが撮影した素材を使いスライドで説明。他の匠のプレゼンやサポートメンバーの下川氏、生駒氏らのアドバイスも生かした。ランプシェードはガラスの色合いと紋様の組み合わせで灯りのバリエーションは無限。ランプ内に和紙、企業のロゴマークを入れるなど、顧客の要望に沿ったオーダーメイドでの商品化を視野に入れるほか、「長崎くんち」に出演する当番町のための作品も手がけたいという。

これまで一度も営業活動をしたことがないという竹田さん。プロジェクトを通じ支えてくれた多くの人や苦悩を乗り越え、一つのプロダクトを生み出す同志たちとの出会いがガラスの持つ可能性、自らの視野も広げたと話す。今後は全国の匠とコラボレーションしながらガラス工芸の魅力をより多くの人に発信したいといい、今回のプロジェクトが大切な伝統を守りつつ、次の革新に挑戦する大きな契機になったようだ。

商談を前に笑顔を見せる竹田さん

ランプシェードの制作に励む竹田さんと下川氏（右）

竹田 礼人
長崎県／グラスブロワー

1972年生まれ。1991年長崎南山高等学校を卒業後、父が営む「有限会社 瑠璃庵」に入社しガラス職人の道に進む。長崎ガラスが生まれた土地でガラス職人を続けることに深い意義を感じ、日常食器のほかに長崎くんちの龍の眼などの制作にも携わっている。18世紀ごろに長崎で作られていたといわれる長いそそぎ口が特徴の冷酒用酒器を復元した「長崎チロリ」が代表作。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT